



W-4 Airdale

通称「エアデール」と呼ばれているシステムで、1950年代後期から70年代の中期頃まで外観はほぼ同じながら、ユニット構成を変えながら生産されたロングセラーシステム。ユニークな上から見ると6角形の箱のデザインでウーファーのみ後ろが複数のスリットになったバスレフキャビネットに装着され、その上の部分の隔離されたスペースにミッドレンジとトゥイーターが装備された斬新な構造だった。初期のシステムは30cmウーファーに12cmのミッドレンジが2つ正面の左右に振り分けられて装着され、5cmのトゥイーターは真上に向けて装着されている。その後ユニット構成は3wayと同じでも、少しユニットの種類が入れ替わりながらモデルチェンジが何度もあり、後期になるとウーファーが38cm、ミッドレンジは20cmに変更になり、そのミッドレンジ用ユニットはトゥイーターの横に上向きで装着されるようになった。W-3とほぼ同じようなユニットを装備しているが、大型システムに負けないくらいの迫力とスケール感のあるサウンドが再生される。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

第16回 Wharfedale (50年代後期)

今回紹介する2機種は50年代の後期に独創的な設計思想で開発されたバスレフ箱タイプのW-3とW-4システム。両者は前回紹介したFSB / 3システムと同様に、すべてのユニットの振動板が同じ紙素材で統一された3wayシステムとなっている。この2つのシステムはミッドレンジに同じ12cmのコーン型ユニットが搭載され、ネットワークは大型のオイルコンデンサーとコイルで構成されている。同社は開発当初からコンシューマーでの音楽再生を前提としていて、一般的な広さでの臨場感あふれる自然で滑らかな再生音のクオリティの高さは、この同年代に開発されていた他の英国製スピーカーと比べても1歩進んでいたように感じられる。

W-3

1950年代の後期に少量のみ生産されたブックシェルフ型の3wayシステム。正面の上部と下部分が斜めにカットされたデザインの箱で丸いダクトのバスレフポートが装備されている。ユニットは30cmウーファー、12cmのコーン型ミッドレンジ、5cmのコーン型トゥイーターの構成で、大きなオイルコンデンサーとコイルが使われているネットワークでコントロールされている。ブックシェルフタイプですが縦置きセッティングを前提としているようなユニットレイアウトになっていて、ウーファーの箱は独立してユニットはそのほぼ正面に取り付けられているが、ミッドレンジとトゥイーターはそのウーファーキャビネットの外側の上に乗せられるような構造で正面上部に斜め上向きに固定されている。その小さい外観からは想像もできないほどスケール感に富み、また表現力に富む中音域の魅力にも納得させられてしまう。

本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田圭司 (アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦 (彩虹舎)



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Wharfedale



W-4 Airdaleの内部写真

ウーファーボックスの上の独立したスペースがもたけられて、4方向に小窓でオープンエアになっている。木の台座に真上向きの搭載せられたSuper3 トゥイーター、その奥にW5 ミッドレンジユニットが正面横に設置されているのが確認できる



W12/W5/SUPER 3

ユニット構成はW12(30cmウーファー)、W5(12cmコーン型ミッドレンジ)、Super3(5cmコーン型トゥイーター)となる。特にW-5ミッドレンジユニットはこの2機種のために開発されたもの



W-3の内部写真

W5ミッドレンジユニットが15度ほど後ろに傾斜した正面のバッフルに、またSuper3 トゥイーターは斜め前方向に傾斜した内部天板の上に設置されているのが確認できる

前回に続いて本日もワーフェール。大小2種が「アトリエ Je-tee」に揃っていた。小型のW3はブックシェルフとフロア型の中間ぐらいの大きさだ。スピーカーとして存在感を主張しつつも、これなら誰とは言われないが家庭内の非理解者に受け入れてもらえるだろう。このサイズのスピーカーは、新製品マーケットではかつていっぱいあったのに、どんどん減ってきている。特に普及価格帯はブックシエルとトゥールボーイだらけになってしまった。ちょっと寂しい。

W3はヴィンテージのギター・アンプのような顔立ちで、そこがとても人なつっこい。30cmウーファーは下部の別箱になっていて、大型マグネット入りトゥイーターとスコーカーは角度を変えて斜め上を見るようにマウントしている。だから頭部にもサラネットが貼ってある。どことなく愛着のわく容姿だ。

シナトラの「エンジェル・アイズ」。音楽のスケールがでかい。大型スピーカーを感じさせる。中高域の上方への放射がそうさせるとみた。声はいまどきスピーカーの確固とした定位ではないが、ひとつの雰囲気がある。この雰囲気は、ライブ会場に行くと、高解像度・ピンポイント定位なんてこれほっつも考えないのに、なぜオーディオに向かうと意識がそこに行くのだろう。書き手や雑誌が、そこばかりを突けば、

メーカーはこんな遊び心や情緒のあるスピーカーを作れっこない。なんだかいろいろ考えてしまった。ロッシーニの「弦楽のためのソナタ集」は古い英国スピーカー独特の翳りや潤いをそれほど強くアピールせず、しっかりとタイトに聴かせる。よく枯れた堅めのエンクロージャーが作用しているように思った。

W3の上位のW4はスコーカーが2つに増えて左右に付いている。ウーファーとスコーカー&トゥイーターが別室方式は同じ。W4は5年に1回出るかどうかの稀少品で、3年に1回のW3と一緒に巡り会えたのは幸運だった。

そのままと同じロッシーニを聴くと深みと重み加わっている。スリットになったバスレフポートが背中についていて、壁(コーナー)につけるともっと雄大に鳴るはずだ。部屋の中央にセットされているけど、とてもいい感じが音が広がっている。シナトラも大物然とした態度で歌い上げてくる。シナトラがシナトラらしくそこにちゃんと立てば、あらゆる音楽に対して無敵じゃないかと思ってしまう。そんな説得力がある。

80年代ポップスの傑作、スイング・アウト・シスターの「ブレイクアウト」であら探しを試みたら、エレクトリックなビートも苦にしている。これは本当に50年代半ばの製品なのかと勘ぐりたくな

いまどきスピーカーにない
このひとつの雰囲気